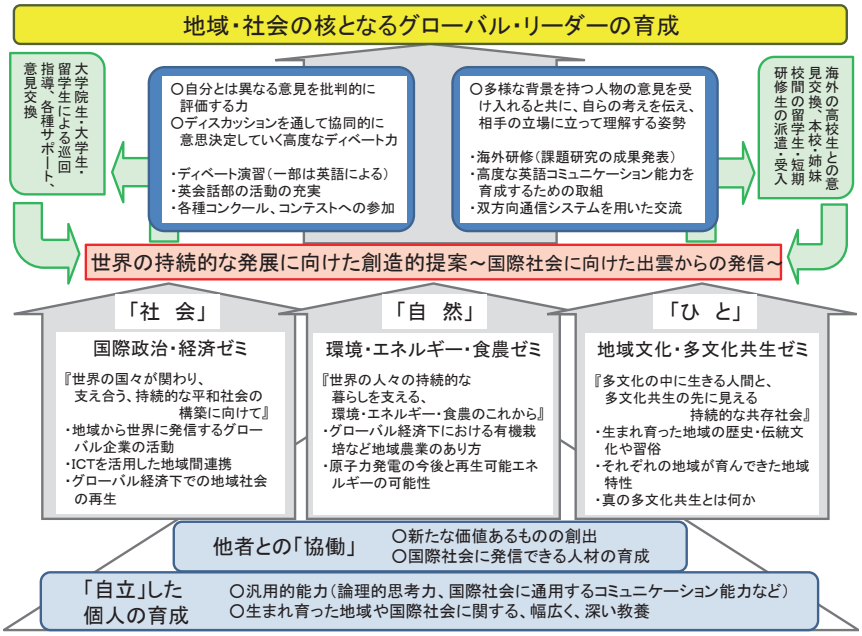
島根県立出雲高等学校

「自立」と「協働」により、地域・社会の核となるグローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

『世界の持続的な発展に向けた創造的提案～国際社会に向けた出雲からの発信～』をテーマに、「社会」「自然」「ひと」の三つの切り口からアプローチする。質の高い英語教育・教養教育による「自立」した個人の能力育成と、海外の高校生との意見交換等「協働」的な学習により、「地域・社会の核となるグローバル・リーダー」を育成する。



教育課程（平成29年度1～3年生用）（SGH対象生徒のみ）

科・学科・類型			普通科				備考
教科	科目	標準単位	1年	2年 文	3年 文	単位数の計	
国語	各科目		5	6	6～8	17～19	
地理歴史	各科目			5	4～8	9～13	
公民	各科目		2		0～4	2～6	学校設定科目「SGベーシックセミナー」のため、「現代社会」1単位を減
数学	各科目		6	6	0～5	12～17	
理科	各科目		4	2	4	10	
保健体育	体育	7～8	3	2	2	7	
	保健	2	1	1		2	
芸術	各科目Ⅰ	2	2			2	
外国語	各科目		6	7	6～9	19～22	
家庭	家庭基礎	2	2			2	
情報	社会と情報	2		(2)1		(2)1	学校設定科目「SG探究」で1単位を代替
共通教科・科目単位数計			31	30	28～31	87～92	
音楽／美術	各科目				0～5	0～5	
ＳＳ	ＳＳ基礎	学校設定	1			1	「総合的な学習の時間」の1単位を代替
ＳＧ	ＳＧ探究	学校設定		2	1	3	2年「総合的な学習の時間」の1単位を代替 2年「社会と情報」の1単位を代替 2年「総合的な学習の時間」の1単位を代替
専門教科・科目単位数計			1	2	1～6	4～9	
単位数計			32	32	32	96	
総合的な学習の時間		3～6	(1)	(1)	(1)	(3)	学校設定科目「SS基礎」「SG探究」で3単位を代替
ホームルーム活動（年間35時間）		3	1	1	1	3	
合計			33	33	33	99	

SGH・SSH対象生徒の区分け

（H30.5.1現在）

	理数科	普通科 理系	普通科 文系	合計
3年	1（39名）	3（136名）	4（142名）	8（317名）
2年	1（40名）	4（143名）	3（132名）	8（315名）
1年	1（37名）	7（268名）		8（305名）

SSH対象生徒（H25年度入学生から）　SGH対象生徒（H26年度入学生から）

地域・社会のリーダーとして貢献できるグローバル人材の育成を目指して

本校では平成 26 年度から表題の構想を掲げて研究に取り組んできた。構想中に挙げる「リーダー」、「人材」を本校では次のように定義している。

・「グローバル人材」－急速に発展するグローバル化社会をたくましく、しなやかに生き抜く人材。
・「地域・社会のリーダー」－地元地域が抱えている課題（人口減少・過疎化への対応、外国人増加に伴う多文化共生社会の構築、など）の解決を、国際的な視点で考えることのできる人材

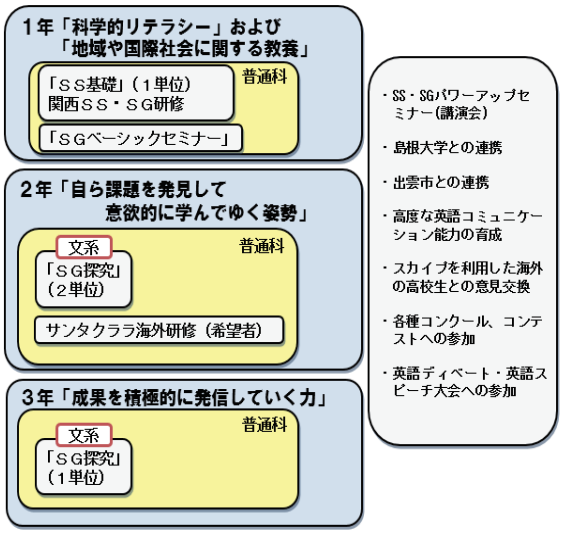
このような人材を育成するため、本校ではこれまでの「知識習得型」に極端に偏る学びから脱却し、新たな出雲高校の「学びのスタイル」を確立すべく、研究を進めてきた。この新たな「学びのスタイル」を以下のように定めている。

①協働的な学習
・教えあい、学びあいによる「新たな価値あるもの」の創造
・地域、国際社会への発信
②客観的根拠に基づく思考
・論理的に考える（Logical Thinking）
・多角的・多面的に考える（Critical Thinking）
・事実に基づいて考える（Data - based Thinking）

このような「学びのスタイル」の確立を目指し、本校では事項に挙げる形で 3 年間の取組を進めている。

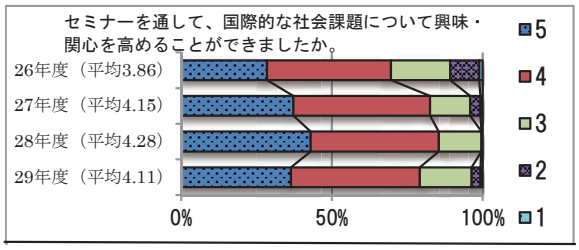
出雲高校 SGH ／高校 3 年間の取組

本校ＳＧＨ 3 年間を図表化したのが以下である。



本校はＳＧＨに加えてＳＳＨの指定も受けている。普通科と理数科を設置しているが、そのうち普通科でＳＧＨの取組を行っている。1 年次は普通科 7 クラス全員を、2 ～ 3 年次は普通科文系（3 ～ 4 クラス）を対象としている。

1 年次におけるＳＧＨの中心的な取組としては、教育課程上の特例により、科目「現代社会」の授業時数の一部を減じて、「ＳＧベーシックセミナー」を行っていることである。このセミナーでは、「国際的な社会課題についての関心を高め、主体的・積極的に学習する態度を養う」こと、「生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い知識を身に付けさせる」こと、「第 2 学年で取り組む課題研究に向けた動機づけを行うとともに、研究テーマ設定のための基礎となる知識の定着を図る」ことを目的とし、大学教員や地域人材を講師として講義やフィールドワークを行っている。以下に示すとおり、生徒からの評価も高い。限られた時間ではあるが、このようなセミナーを 1 年次に行うことは探究的な学習を進める上で非常に有用であると考えている。



※生徒アンケートより抜粋。５段階評価で、５が最高

また、1 年次には全員がＳＳＨプログラムを受講している。このプログラムで科学的素養を身に着けることは、2 年次以降のＳＧＨプログラムを進めるうえでも有効である。

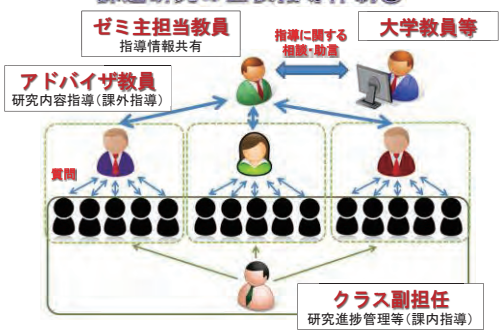
2 年次からは普通科文系を対象としてＳＧＨプログラムを行う。2 年次には年間 2 単位で課題研究を進め、毎年 2 月には成果発表会を行っている。

3 年次には 2 年次に行った研究をもとに、自らの考えを発信する。7 月末には約半数の生徒が出雲市役所を訪れ、市長や市の職員へ政策提言を行う。残りの半数は島根大学を訪問し、外国人教員や留学生に対して英語によるプレゼンテーションを行う。3 年次にこのようなゴールを設定することで、2 年次の研究にも自分のこととして取り組むことができる。

課題研究の指導体制

本校ＳＧＨプログラムの中心となるのが２年次の課題研究である。本校ではすべての生徒に指導を行う上で、「全校指導体制」と「複数の教員が関わる多角的・多面的な指導体制」を行うこととした。以下が本校での全校指導体制を模式化したものである。

課題研究の全校指導体制①



本校では班ごとによるグループ研究とし、授業内でクラス副担任が指導をする。各班の進捗状況等を見て指導することはできるが、クラスあたり８班程度の研究の細部まで指導することは難しい。そのため、各班にアドバイザ教員がつき、課外で研究の仕方等について指導をする。アドバイザ教員は原則としてすべての教員が務める。そのため、教員一人あたり１班から２班の指導をすることとなり、細かい点まで指導が可能である。また、外部指導者との連絡はゼミ主担当教員が行う。専門的なことなど、アドバイザ教員だけで指導することが難しい場合には、ゼミ主担当教員を通じて外部指導者に連絡をとる。連絡を受けた外部指導者はメールによる指導や助言を行ったり、必要に応じて本校を訪問し、生徒を直接指導したりする。これに外国人教員と大学院生等が加わり、以下の表に示す指導体制となる。

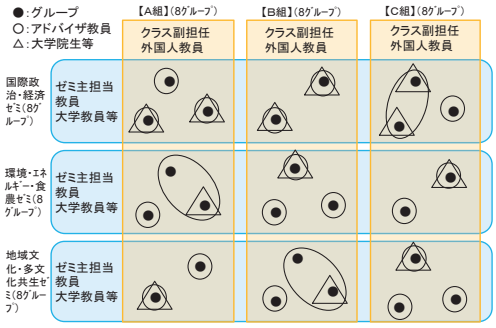
課題研究の全校指導体制②

指導教員等	役割
クラス副担任（授業担当）	・クラスの課題研究の進捗管理 ・研究活動の全般的な相談窓口
ゼミ主担当教員	・ゼミ別講義、ゼミ別発表会等の運営 ・研究活動・内容に関する大学教員へのメール等による相談
アドバイザ教員	・担当するグループの研究活動・内容に関する放課後等を利用した指導
外国人教員	・研究活動・内容に関する指導 ・研究レポートの英語表記に関する指導
外部指導教員（大学教員等）	・研究活動・内容に関するメール等（または直接）による指導 ・ゼミ別講義、ゼミ別発表会での指導・助言
大学院生等	・担当するグループの研究活動・内容に関するピア・サポート

※赤字の教員等が、課題研究の時間に常時生徒の直接指導にあたる指導者

このような指導体制をとることで、生徒は多様な人材から指導を受けることができる。以下は指導者がいかに各生徒に関わるかを示した模式図である。

複数の教員が関わる多角的・多面的指導体制



一人の生徒あるいは一つのグループに対して学校内外の複数の指導者が、それぞれの専門性を生かした異なる角度から指導することで、本校の指導で目指している「多角的・多面的な思考」の育成につながっており、「出雲モデル」の指導方法が確立されたものと考えている。

もちろん、このような全校体制での指導を進めるためには、指導者間の共通理解が必要である。そのため、本校では独自のテキストを開発し、生徒・指導者に配布している。これにより、同じ目線にたって指導をすることができる。

また、このような指導体制は多面的な評価にもつながる。大学教員と共同開発をしたルーブリックを活用し、複数の指導者が多面的に生徒の活動等を評価している。また、評価の一部として開発したポートフォリオをファイルにし、生徒と課外で指導するアドバイザ教員等の連絡をとっている。このファイルによって、生徒は自己の振り返りができ、指導者は生徒の活動を把握して評価するとともに、必要な指示等を行うことができる。

ポートフォリオファイル

これまでの主な成果

これまでの４年間を通じての主な成果として、以下のようなものが挙げられる。

①出雲高校の「学びのスタイル」（協働的な学習、客観的根拠に基づく思考）（多面的指導体制）の確立

②生まれ育った地域や国際社会が抱える諸課題についての興味・関心の醸成

③将来のグローバル・リーダーとして、地元や国際社会のために貢献すべきだという使命感や留学等を含めた国際社会での活躍を求める意識の醸成

④情報モラルを基盤とした情報収集・活用能力育成

⑤英語コミュニケーション能力向上への意識の醸成と４技能バランスのとれた能力の育成

⑥高大連携の推進

⑦グローバル人材育成に関する、保護者をはじめとした地域全体の理解の醸成

⑧公的機関から表彰された生徒数等の増加

⑨プレゼンテーション能力の育成

これらについては、各年度末に本校から各指定校等へ配布している報告書に詳しく記載しているので、そちらをご参照いただきたい。

また、自ら主体的に研究に取り組み、社会へ還元しようという意識も高まりつつある。実験やフィールドワーク、アンケートやインタビュー等を行うことで、より客観的なデータを集めて研究を進めようとする班が増えてきた。また、学校で準備した発表の機会だけでなく、地域の NPO と協力してイベントに参加するなど、行動を起こす者も増えてきた。これらの主体的な行動はまだ限定的であるが、より多くの生徒の行動へとつながるよう、研究を進めたい。

島根日日新聞　平成29年（2017年）6月13日（火曜日）

多文化共生へ高校生の力

にぎわい広場、盛況　出雲高の課題研究きっかけに

島根日日新聞

6月13日

※地元 NPO と協力して。平成２９年６月１３日付島根日日新聞

新たな取組

最後に、ここ最近の新たな取組について記載する。

①課題研究と他教科との結びつき

課題研究を意識した既存教科の展開が進みつつある。例えば課題研究と教科「家庭」におけるホームプロジェクトの連携、学校設定科目での「論理性の育成」と教科「国語」の連携などである。また、学校設定科目内で日本語による「ディベート演習」を行っているが、教科「外国語」でもこれまで英語ディベート指導を行ってきた。「外国語」における英語ディベートで扱うテーマはこれまであまり客観性や根拠を重視していなかったが、日本語「ディベート演習」の取組も参考にし、これまで以上に調べた資料、根拠に基づく、論理的な展開を重視した内容へと発展してきた。

②教科のＳＧ化

先に述べたように、課題研究において出雲高校の「学びのスタイル」が確立された。各教科でもこの実践を目指す取組を進めてきたが、平成 29 年度に新たに全教室にプロジェクタを設置し、ＩＣＴ機器を活用しながら一層教科のＳＧ化を進めようとしている。

平成 30 年 3 月にとったアンケートでは、約 64%の教員がＩＣＴ機器を活用した、と回答した。国語、外国語に限れば、前者で 80%、後者で 91%の教員が活用していた。ＩＣＴ機器の活用をすることによって、直接的に機器を活用して「協働的な学習」や「多面的な評価」が進むだけでなく、事項の説明等にかかる時間を短縮させ、その分生徒の活動時間を増やすことができる、といった効果もある。

紙面の都合によりここまでとするが、今後も新たな取組を進め、他の学校等へも還元したい。

※「コミュニケーション英語Ⅱ」での英語による発表の様子